



地域連携センター報

Vol. **7**

COMMUNITY LIAISON CENTER

平成20年9月30日発行

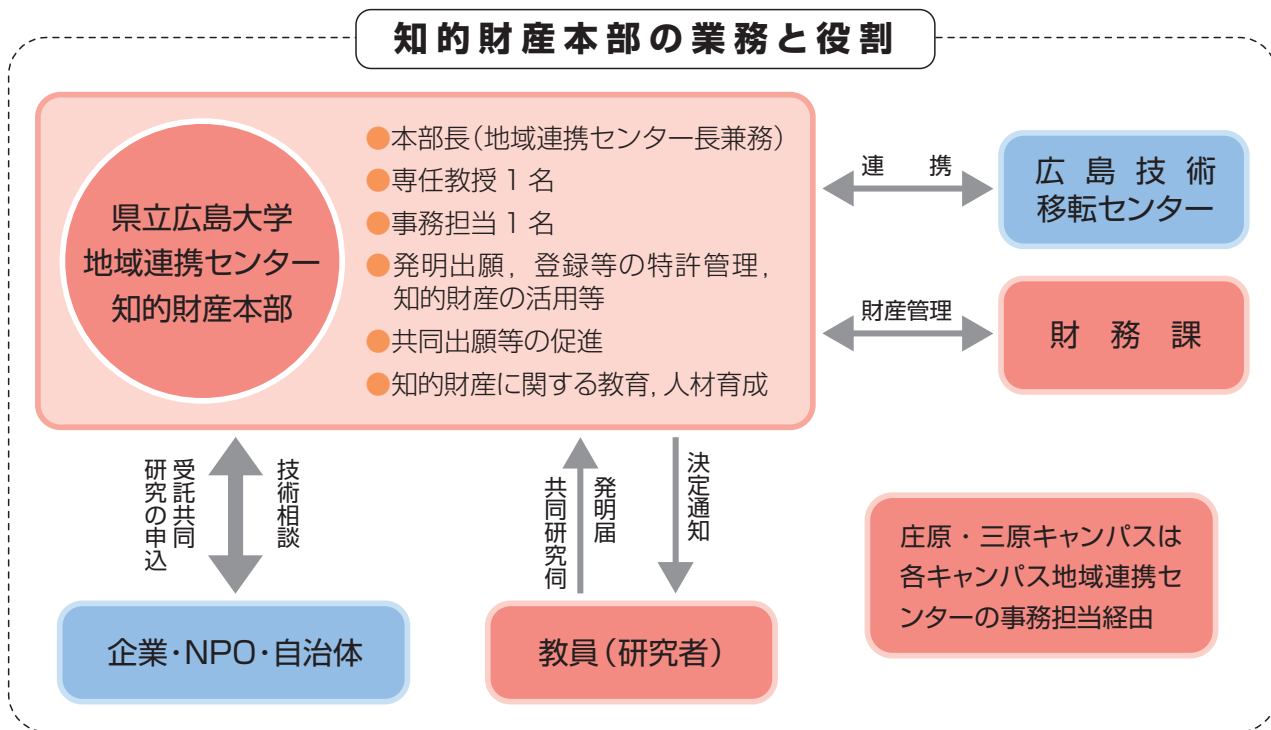
県立広島大学地域連携センター

〒734-8558 広島県広島市南区宇品東一丁目1番71号 電話082-251-9534 E-mail:renkei@pu-hiroshima.ac.jp

知的財産本部設置

県立広島大学にとって、産官学連携活動とそれに伴う知的財産創出・管理業務は重要性を増しています。本年4月より暫定的ではありますが地域連携センターに知的財産本部を設け、専任教員（佐伯達志教授，8ページにプロフィールを紹介）と事務担当1名を配して、研究シーズ発掘，外部資金導入，知的財産創出などの一元化を図ってきました。今後，業務や案件の増加に応じて体制整備すべき課題はありますが，教員の研究活動を知的財産として育て，守る活動を加速していく所存です。

知的財産本部の業務と役割



知的財産本部は，大学の研究成果を知的財産として社会に還元することを目標としています。対象は発明，考案，ソフトウェアの他，実験動物や細胞株などの研究成果有体物を含みます。これらの知的財産を一元的に管理し，下記の業務を行います。

1. 知的財産の創出，管理および活用
2. 知的財産に係る技術移転及び実用化の推進
3. 共同研究，受託研究，奨励研究の推進
4. 知的財産に関する教育及び人材育成

広島キャンパス

HIROSHIMA CAMPUS

産学連携

2008廿日市市スポーツ振興ワークショップ

地域戦略協働プロジェクト「廿日市市におけるスポーツ振興のニーズ調査と計画策定に関する研究」の一環として、ワークショップ「食とスポーツで健やか“こころ”と“からだ”を育むために」を8月24日に実施し、74名の方が参加されました。



1	食と健康	加藤 秀夫
2	就学前児童のための“的あてゲーム”	中瀬古 哲
3	高齢者のための“ウォーキング”	塩川 満久
4	スポーツのための応急処置“テーピング”	トレーナー 梶山 祥子

産学連携セミナー

〈広島信用金庫〉

地域との密接な関わりの中で事業を営む若手経営者を対象に、地域の課題や身近な問題に関する見識を深め、企業あるいは自身の生活に役立つ知識や見識を深めるとともに何らかのビジネスチャンスを開拓する機会として、「食と健康」のテーマで勉強会を開催しました。参加者は延べ109名でした。



3/14	広島カーブのための栄養サポートプラン	加藤 秀夫
4/15	メタボ予防のための食事の工夫	岩本 珠美
5/15	健康スポーツ科学	三浦 朗
6/18	元気を育む食生活	本学非常勤講師 泉谷 昌子
7/17	徒然なるままに健康奉仕	広島大学 神田 博史
9/22	そろそろ血糖値が気になる方への臨床栄養学	川崎医療福祉大学 小野 章史

〈呉信用金庫〉

7月4日に粟島浩二准教授を講師とするセミナーを開催しました。テーマは地元商店街の活性化のための「個店力を磨く PartⅢ」です。参加者16名は、ほとんどが初回からの参加で、ディスカッションも活発に行われ、継続開催を望む声が多く出ました。



公開講座

連携公開講座「りんごの秘密」

財団法人ひろしま美術館と連携し、科学、文学、美術の各方面からりんごの魅力を探る講座を開催しました。延べ314名の方が受講されました。

5/10	りんごの科学	入船 浩平
	りんごの暦と物語	田淵 桂子
5/17	人が林檎を手にした時	佐伯 恵子
	描かれたりんごの物語	ひろしま美術館 水木 祥子
5/24	近代文学の「りんご」	坂根 俊英
	描かれた「りんご」一机の上りんごが載るまで	ひろしま美術館 古谷 可由
5/31	18・19世紀のりんご	天野みゆき
	セザンヌのりんご	ひろしま美術館 渡辺 純子

「みんなでつくろう！簡単おやつ」

広島市宇品公民館との共催で、4日間にわたり、延べ89名の親子を対象に、おやつづくり講座を開きました。身近な材料を使い、手づくりの楽しさや、健康的なおやつへの理解を深めました。

5/24	牛乳でつくろう！	樹山 敦子・山岡 雅子
6/7	まめで作ろう！	山岡 雅子・森脇 弘子
6/21	くだものでつくろう！	森脇 弘子・上田 愛子
7/5	やさいでつくろう！	上田 愛子・樹山 敦子

シティカレッジ「月の文化誌—古今東西「月」を読む」

もっとも身近な天体であり、神話・伝説や詩歌・物語・絵画・音楽などの素材とされてきた「月」を題材とする公開講座を、広島市まちづくり市民交流プラザで開講しました。延べ481名の方が受講されました。

6/28	月の愛で方—信仰と風流—	樹下 文隆
	月と暦—閏月を中心に—	秋山 伸隆
7/5	奥田元宋と「月」の絵画	奥田元宋・小由女美術館 渡邊 憲司
	かぐや姫のふるさと—日本文化の深層を探る—	西本 寮子
7/12	マザーグースと月の絵本	田淵 桂子
	西洋絵画と「月」	ひろしま美術館 古谷 可由
7/19	月と音楽	小玉 好行
	昇天する魂—近代文学の「月」—	坂根 俊英
8/2	月に人を想う	柳川 順子
	能から見る中世びとの月のイメージ	樹下 文隆

研究紹介

巖島神社の謎に魅せられて

人間文化学部国際文化学科 教授 松井輝昭

巖島神社は平成8年12月に世界文化遺産に登録され、世界の各地から多くの方々が「観光」に訪れるようになりました。広島県民も巖島神社を地域の誇りと考え、「心の故郷」とも思っておられるようです。私も以前から巖島神社を研究したいと考えていました。「平家納経」の保管庫でもあった宝蔵について、約20年まえに小論をまとめたことがあります。しかし、私の巖島神社研究はこののちほとんど進みませんでした。巖島神社は史実と伝承が一体化しているだけでなく、歴史の古い要素と新しい要素が折り重なっているため、この壁を容易に乗り越えられなかったのです。

巖島神社の中世文書の伝わり方を調べているとき、同神社は巖島大明神に仕える組織であるという自明のことに気付きました。巖島神社は社会変動に揺り動かされながら、その祭りは変わることなく続いてきたということです。これはいまから数年前のことです。同神社の新旧の歴史的要素を弁別しながら、長い時間軸で後代の史料をも参照しつつ考えると、いままで謎と思っていたことにも解決の糸口が見つかりました。しかし、巖島神社の一つの謎解きが終了すると、新しい謎がまもなく私のまえに立ちほだかかります。

いま取り組んでいる巖島神社の謎解きは、平清盛の怨霊鎮魂の痕跡と思われる「今社」を確認することです。かつて御霊川と呼ばれた紅葉谷川のの上流にあり、四宮神社の奥の「若宮原」をその候補地と考えています。



現在の四宮神社

「親子で楽しむ油絵スケッチ」

7月26日、安森征治先生ご指導のもと、小学生と保護者20名が油絵に挑戦しました。保護者からは「子どもといっしょに夢中になれることが見つかった」「子どもがとても楽しく集中して描いてよかった」などの感想が寄せられました。



金融教育と日本人の金融資産選択行動

経営情報学部経営学科 准教授 村上恵子

加入者自らが運用リスクを負う確定拠出年金制度（日本版 401k）が日本に導入されて、今年10月で7年になります。この間、確定拠出年金の加入者は年々増加してきました。しかしその一方で、わが国の確定拠出年金加入者の約4人に1人は、運用リスクを負わず、その資産の100%を定期預金に代表される元本確保型商品で運用していることが知られています（NPO401k 教育協会、2007年3月調べ）。金融資産選択におけるこのような傾向は、確定拠出年金加入者だけに見られるものではありません。金融自由化が進む現在においてもなお、わが国家計の多くが資金の大半を預貯金や保険で運用していることは周知のとおりです。その原因として、税制上の問題や証券市場への信頼性の低さといった市場の問題、日本独自の文化的側面や日本人のリスク許容度の低さ、日本人の金融知識不足などが指摘され、これまで多くの研究成果が蓄積されてきました。ただし、このうち日本人の金融知識不足の観点に立った研究はいまだ十分に進んでいません。

本研究室では、金融知識をほとんど持たない大学生に対して初歩的な金融教育を提供し、金融知識の習熟度と資産選択行動の関係を分析してきました。その結果、金融に関する知識を新たに習得した学生のうち習熟度の高い学生は、より効率的な資産選択ができるようになることが明らかになりました。また、初学者向けにどの程度の金融教育を実施すべきかについても検討してきました。今後は、確定拠出年金制度を導入している企業に協力を呼びかけ、確定拠出年金加入者の金融知識の程度と資産選択行動の関係を分析したいと考えています。

「理科体験教室」

小学校4～6年生を対象とした理科体験教室を開きました。延べ31名が参加し、理科の実験を楽しみました。



8/1	不思議なミクロの世界をのぞいてみよう	西岡 和恵
8/8	光と色と	

庄原キャンパス

SHOBARA CAMPUS

市民公開講座

平成20年度県立広島大学市民公開講座（前期） 「温故知新」－庄原市の宝，現在・過去・未来－

本講座は庄原市教育委員会との共催によるものです。今回の講座では、庄原市にある広大な田畑や山林などの豊かな自然資源，その自然に育まれてきた文化，歴史などの「宝」について講座を実施しました。それらの「宝」を今，見つめなおすことは，より元気でやすらぎのあるまちづくりへとつながり，新たな方策や活力，乗り越えるべき問題点を見いだすことができるからです。すなわち，「故きを温めて新しきを知る」です。

今回の講座では市民の生活や文化に直結するテーマが多く，熱心に講義を聴講されている受講生の姿が印象的でした。6月24日～7月25日の間の5回の講座で延べ192人の市民が受講しました。後期においても，庄原市の「宝」を通じた「温故知新」講座を10月下旬から実施します。講座の詳細につきましては，庄原市教育委員会生涯学習課社会教育係（0824-73-1188）にお問い合わせください。

日程	題 目	講 師
6/24	地域ブランドへの取り組み	吉野 智之
6/30	明治期の英語教科書：庄原英学校とナショナルリーダー	馬本 勉
7/8	里山と豚との新しい関係	村田和賀代
7/16	庄原の森を楽しむ	本学元教授 宮本 誠
7/25	倉田百三『出家とその弟子』再読	遠藤 伸治



大学公開講座

平成20年度県立広島大学公開講座（第1回） 「今後の自治体経営と地域振興」

庄原キャンパスにおける本学主催の第1回公開講座を6月9日に実施しました。年々，自治体を取り巻く環境は厳しくなっており，かつ自治体への住民からの要求も厳しいものとなっております。備北，芸北地域の自治体職員を対象に，このような状況において今後の自治体運営と地域の活性化について，行政，財政，地域振興を専門とする3名の講師による講義を行いました。包括協定を結んでいる庄原市，安芸高田市，世羅町，産学官連携組織を作っている三次市より，計29名の職員の方の参加がありました。

回	題 目	講 師
1	国と地方の財政	中国財務局理財部次長 井上 浩
2	協働の時代における自治体の行政経営	吉川 富夫
3	住民自治活動の活性化と大学活用	本学名誉教授 野原 建一



産学官連携

しょうばら産学官連携推進機構

5月29日 庄原グランドホテルにて，赤岡功学長も出席して第7回理事会（平成20年度総会）を開催し，平成20年度事業計画を決定しました。当機構の主な事業内容は「マッチング事業」，「セミナー事業」，「ソフト事業」で，マッチング事業では，今年度実施した地元企業へのアンケートから得た地域ニーズと，

大学の有する研究シーズとのマッチングを目指します。また、今年度はプロジェクト事業として、異業種のアグリビジネス参入支援・推進を目的に、先進事例の紹介セミナーや見学会などの開催を予定しています。その他、地域と学生との交流支援や機構だよりの発行、ブログによる情報発信などを通じ、産学官連携がより活発に行われるよう、様々な事業を展開していく予定です。

三次イノベーション会議

6月13日に三次市まちづくりセンターで三次イノベーション会議総会が開かれました。村井政也三次市長、三田正司三次商工会議所会頭、赤岡学長など25名が出席し、事業報告、収支決算、事業計画、予算と役員構成の各議案が審議され、いずれも原案通り採択されました。各事業は経験を踏まえて次第に洗練されてきており、有効な成果が上がるようになっていきます。



国際交流

JICA研修受け入れ

6月3日～7月8日の間、JICA（独立行政法人国際協力機構）の地域別研修・南東欧地域産業振興政策コースが開催されました。ボスニア・ヘルツェゴビナ、マケドニアから5名の研修生が主に広島県内で研修しました。本学はこの事業の協力機関となっており、伊東和久教授、野原建一本学名誉教授らが研修内容の作成、研修生の選抜をJICA等と一緒に行いました。研修生は、世羅町の第6次産業や公的機関の海外販売促進支援事業、県内物産のアンテナショップ、産学官連携などに関心を持ち、帰国後の地域振興策への応用を考えていました。なお、本学での研修初日となった6月9日には、赤岡学長を表敬訪問しました。

研究紹介

言語の保存と復興

生命環境学部環境科学科 講師 福岡千珠



昨今かつてなかったほどに、さまざまな文化の「保存」の必要性が叫ばれています。世界遺産の大ブームや、つい数十年前のモノを保存したり、存命中の有名人に関するモノを集めた博物館など、その

「保存」の欲望はとどまるところをしりません。

そうしたなかで、「言語」もまた、「保存」の欲望の対象となっています。話者人口が減少し、存続の危機にある言語を危機言語と呼び、それらをどうにかして「保存」したり、「復興」させたりしようとする動きが活発となっているのです。

危機言語についての文章を読むと、頻繁に遭遇する表現があります。その典型的なものが、「世界で今日話されている言語の数は6800強」であり、「そのうち96パーセントの言語の言語は生物種の絶滅をしのぐ速度と割合で消滅しつつある」といった表現です。しかし、こうして対策が「時間との戦い」であることが強調されればされるほど、危機言語の保存という試みは、その行為そのものの正否や波及的な影響を問うことから絶えず免除されることとなっているのです。

しかし、ある言語を「危機言語」として分類し、「絶滅」の危機に瀕していると判断を下す行為は、それを社会の中に位置づけ、解釈し、構築する行為です。「絶滅」の迫った「危機言語」として分類された時点で、言語の社会的な位置づけは変容してしまうからです。また、多様な側面を持つ人々が、「危機言語の話者」として位置づけられ、さらに、「保護」する側とされる側が、次第に固定的な関係性となって定着してゆくこととなるからです。つまり、言語の「保存」は、言語を変化させてゆくことなのです。私は、アイルランドを例にとり、言語の「保存」の試みがどのように、その社会的な位置付けを変えていくのかを研究しています。

学術講演会のお知らせ

[日時] 11月17日(月) 14:40～16:10

[場所] 庄原キャンパス大講義室

[講師] 徳野貞雄(熊本大学教授)

[演題] 限界集落と地域おこし

三原キャンパス

MIHARA CAMPUS

新たな取り組み

広島県看護教員養成講習会

本学では、広島県の委託事業として、今年度から「看護教員養成講習会」を実施しています。



この講習会は、厚生労働省管轄の看護専門学校における教員養成を目的としています。受講生は、講習会修了後、看護教員として従事する予定で、20歳代から50歳代の27名が、5月から12月までの8か月間、日々研鑽しているところです。



講習会の内容は、厚生労働省の規定により基礎分野・教育分野・専門分野の3分野から編成されています。基礎分野では「看護教員としての必要な基礎知識を学ぶ」とし、哲学や情報科学等を学習します。教育分野では「教育の原理を系統的に学ぶ」とし、教育原理や教育心理学、教育評価等、教育学の基礎を学習します。専門分野では「看護学の教授、学習活動に関する理論を学ぶ」とし、看護論、看護教育制度や看護教育課程の基本的学習から、看護学生の状況に合わせた教育方法を具体的に学び、実践できるよう、演習や教育実習等があります。

受講生の状況は、看護教員経験1～数年の方が約6割、その他は4月まで病棟で看護師をしていました。当初は、関連文献を何冊も読みこなして講義や演習に臨むという学習方法に慣れず苦労していたようですが、今では、自分たちの学習ペースも身につけ、内向的と自覚していた受講生も自分の考えを述べるできるようになりました。

講習会修了後には、患者様に応じた看護支援ができる看護学生を育てる看護教員として、“自分らしい教員像”を創ることができるよう、学習環境にも考慮しながら運営しています。



産学連携

しまなみ信用金庫との産学連携講座

「商店街を活性化して三原のまちを元気にしよう」

連携協力協定に基づいて本学が企画協力する産学連携講座を昨年度に引き続き開催します。今年度は、「商店街の活性化」をテーマに、主に商店経営者向けの連続講座となっています。

本講座をきっかけにして、三原の中心市街地整備が始動することを目指します。

回	日程	題 目	講 師
1	8/7	商店街とまちづくり	間 野 博
2	10/9	中心市街地活性化制度	中国経済産業局職員 中国地方整備局職員
3	11/6	商店街主体の街づくり 成功事例	山口道場前商店街振興組合 吉 松 昭 夫
4	1/15	住民参加による商店街 活性化手法	ヘルスプロモーション 研 究 セ ン タ ー 岩 永 俊 博
5	2/12	ワークショップ「三原の 商店街活性化提案」	水 馬 朋 子

地域連携

健骨・健康増進セミナー：メタボ予防運動教室

今年度から全国でもメタボ検診が開始されていますが、健骨・健康増進支援チーム(石崎文子教授 他)では、10年余にわたり三原地域で住民の骨検診を行ってきました。また、数年前からは健骨・健康増進セミナーとして、骨粗鬆症だけでなく、メタボが病態に関連し、寝たきりなどの原因ともなる脳・心血管障害や認知症などの疾病を予防するために中高年女性の検診を行っています。



結果はそのつど個々に報告し、生活指導を行っていますが、一方で積極的な運動指導や栄養指導を行い、その効果を客観的に評価するために運動量、動脈硬化、骨密度などの経過や変化に注意をしています。今年度もメタボ予防活動の一貫として、運動習慣の定着や、個々に合わせた安全な運動の修得を目的とした、塩川満久准教授の指導による運動教室を6月から7月にかけて6回開催し、延べ約150名の方が参加されました。熱心で活力みなぎる中高年参加者の皆様から私達もまた元気を頂戴しています。

公開講座

大学公開講座

対人支援スキルアップ講座「Ghostを探せ！」

7月12日に、対人支援スキルアップ講座を開催しました。参加者は、福祉や医療機関のソーシャルワーカーや臨床心理士、作業療法士などで12名でした。

前半は、構成主義的家族療法の視点から、クライアントの訴えを「ゴースト」として説明しました。つまり、クライアントの訴えは、問題の解決が困難であるところだけを取り上げて構成した騙りであると捉える視点を提示しました。さらにこの「ゴースト」を退治する技法を、具体的な場面に当てはめて説明しました。

後半は、家族カウンセリング室に移動し、講師が、クライアントの訴えである「ゴースト」を退治する一例を示した後、参加者に退治法を実践してもらいました。このような家族療法的なワークショップの経験者は少なかったため、参加者には新鮮な体験だったようで好評でした。

三原シティカレッジ'08

三原地域連携推進協議会（三原市、三原商工会議所、県立広島大学他）では、三原シティカレッジ'08を開講しており、今年度は市民講座7講座、専門職講座3講座を実施しています。詳しくは、ホームページ（<http://www.mhr-cci.org/renkei/>）をご覧ください。

国際交流

JICA研修生との交流会

2月13日、JICA（独立行政法人国際協力機構）主催の「医療技術スタッフ錬成コース」で来日中の研修員が、福祉用具の利用や障害者の生活支援についての研修のために来学しました。研修後には、学生、教職員、研修に協力した住民と共に、本学食堂で交流会を行いました。研修員は、コスタリカから作業療法士1名、フィリピン、カンボジア、タンザニアから理学療法士各1名でした。開発途上国からのリハビリテーション分野の研修生が本学に来学するのは一昨年度に続き2回目となり、今回は学生や住民の協力も得ることができました。



研究紹介

支援論の世界 —身体症状と対人関係

保健福祉学部人間福祉学科 准教授 大下由美

身体症状は、通常医学の問題と捉えて治療されますが、同様の身体症状を、生活場面での対人関係の問題の表れと捉えて、対人関係の問題の改善から症状の改善を図る支援論の研究があります。

具体例で考えてみましょう。ある夫婦は喧嘩を繰り返しています。ある日、子どもが急に高熱を出し、夫は手際よく子どもを病院へ連れて行きました。妻はそんな夫を見直します。この出来事をきっかけに、夫婦喧嘩は表面的に止まります。つまりこの夫婦は、子どもの症状によって、喧嘩を止めることができたのです。しかし、夫婦間の問題が改善されたわけではないので、子どもの症状がなくなれば、再び夫婦間の対立が表面化します。それゆえ、夫婦は、子どもの症状の悪化に注目した言動を取ったり、子どもが訴える症状に過敏に反応したりします。そうすることで、子どもの症状が維持されるのです。このような夫婦間の問題の表面化を避ける役割を担う子どもの症状は、医学的に定義される症状であると同様に、それは、夫婦の関係性を安定化するために作用している症状と言えるのです。

このような対人関係の問題と絡んで維持される症状を改善するには、何らかの特定できる原因があって、症状や問題が生じるという直線的な因果論を放棄して、対人関係を循環的な視点から捉えて支援に取り組むことが最も重要です。この視点に基づく支援論については、拙著『支援論の現在 —保健福祉領域の視座から』（世界思想社、2008年）にまとめました。異なる因果論に基づく支援論の世界の難しさと面白さを体験してみてください。

今後の講座のご案内

●広島保健福祉学会 第9回学術大会

日時 平成20年11月29日(土) 13:00~17:00
場所 本学三原キャンパス1号館1階大講義室

●第6回 脳をみるシンポジウム in 三原

テーマ 『リハビリテーション』

日時 平成21年2月21日(土)
場所 三原リージョンプラザ

開学3周年記念行事

本学の開学3周年記念行事に際し、これまで地域連携センターが取り組んできた地域貢献事業の一端を、「地域の活性化と県立広島大学の役割」というタイトルのもと、遠隔講義システムを活用して披露しました。広島キャンパスからは廿日市市との協働事業（「スポーツは生活文化の要なり」）が、三原キャンパスからは三原市との協働事業（「健康長寿観光」）がそれぞれ市の担当者から紹介されました。また、庄原キャンパスからは観光拓自副市長の、庄原市の現状と将来に向けての抱負が語られました。その後、自由討議と意見交換では、1次産業や2次産業にとどまることなく、販売・情報・観光といった3次産業に事業を展開する、いわゆる6次産業の可能性についてキャンパスを越えて話題となり、今後の新たな産学官連携の課題と方向性を見いだすことができた有意義な記念フォーラムとなりました。

また、会場前のロビーに、昨年度実施した重点研究事業（地域課題解決研究）の成果、地域連携センターの包括協定締結自治体との協働プロジェクトの成果、並びに各キャンパスの教員研究紹介のパネルを展示しました。加えて、三原市は重点研究事業の成果である浮城（三原城）のCG再現ビデオを会場にて公開しました。



佐伯達志

地域連携センター
知的財産本部 教授

出身は愛媛県松山市です。大学は大阪大学基礎工学部化学工学科で、得意分野は、化学工学、分析化学です。修士課程修了後、1972年旭化成に入社し、最初の10年は基礎研究、後の20年は応用研究、製造工程解析、工場管理を担当しました。2003年より、みやざきTLO、九州保健福祉大学、吉備国際大学で産学連携コーディネーターとして、補助金の応募、特許出願サポート、技術移転などを担当し、今年4月より本学に着任しました。

本学の教員から提出された発明届を審査し、発明委員会を開催、特許事務所と協力して出願する、その権利化や維持管理のための中間手続きをとります。

本学で得られた知的財産を社会に還元するため、技術移転機関等と連携、各種イベント等に参加し、技術移転を図ります。

Profile

編集後記

センター報第7号をお届けします。本号では、知的財産本部の設置、各キャンパスの公開講座、開学記念行事などに関する記事を掲載しております。ご支援とご協力をお願い申し上げます。(E)

編集発行

県立広島大学地域連携センター

〒734-8558 広島県広島市南区宇品東一丁目1番71号
電話(082)251-9534/E-mail:renkei@pu-hiroshima.ac.jp

各キャンパス問合せ先

県立広島大学庄原地域連携センター [本号編集担当]

〒727-0023 広島県庄原市七塚町562番地

電話(0824)74-1704

E-mail:gakujutu@pu-hiroshima.ac.jp

県立広島大学三原地域連携センター

〒723-0053 広島県三原市学園町1番1号

電話(0848)60-1200

E-mail:mrenkei@pu-hiroshima.ac.jp